

昭和三十一年度平城宮跡発掘調査概報

Kaga

奈良国立文化財研究所では奈良県教育委員会の協力を得て、昭和三十年八月一日から十三日まで平城宮跡大極殿跡東南の回廊角の発掘を行つたので、その概要を報告する。

平城宮跡の発掘調査は昨年一月、大極殿跡北方約二百米にある道路改修工事に伴う遺跡の発見に端を発するのであるが、今回はその時得られた諸を遡うことを止め、先ず大極殿を中心とする所謂朝堂院の外廊を明らかにする目的をもつて、大極殿跡東南の回廊角附近より始めて、十二堂を包む一廊の東北角を求めの方針を取つた。

ここを選んだ今一つの理由は嘗て大正十二年平城宮跡の保存工事に際し、凝灰岩石敷倒が発見されて、これを平掛かりにすることが出来るからでもあつた。この中南北に平行してでている二条の石敷列の向隔をとつてみると凡そ三十三尺程あつて、その間に回廊が存在していたことを推定されるのである。

かくして大極殿跡東南方で発見された二条の南北石敷とその南で、これに直角に交わる東西石敷を先ず掘出し、二条の石敷の中間をさぐると予想通り礎石や礎石据付跡が現われ梁間二十尺、柱向隔十二尺複廊跡であることがわかり、石敷は雨落溝に当ることが知られた。更にその南を限る東西の石敷の南方でも礎石据付跡を掘したところ、この複廊がこの部に延び、西に折れて大極殿の南方を限つていたことが明らかになつた。

次にこれから東方に延びて十二堂を囲う回廊を探したのであるが、大極殿東回廊の東側の溝敷石は同南回廊の北側の溝と直角に交つていて、東方に分岐せず、その北方約十

三尺程して東方に溝が分れていたことが、土質によつて判明した。それ故にこの溝の南
或は北に回廊を求むべきであると判断されたのであるが、北では礎石跡が現れない。そ
の中に大極殿東回廊東側溝が南回廊の北側で西に折れる角の南方崖の下で凝灰岩、地覆
石が現れ、これがこの奥を入口にして南と東に延びていることが判つた。そうとすれば
大極殿南回廊はここで終り、それが藤原宮跡で見出されていたようにその儘東へ続かな
いことは明らかである。現地形からしても約四尺にも及ぶ崖は南回廊の略南端を限つて
ありこの地奥で、北方に後退して東に向つていたので、南回廊の段が南方へ突出してい
る形勢を伺い得る。かくして東方ではこの高い基壇と先の東西溝に挟まれる巾約十五尺
程の壇が出来るのであるがこの壇上から枅穴のある一尺角余りの礎石が約五尺をへだて
て二列発見された。その間隔は八尺六寸程であり、その位置は正に崖下で発見された基
壇地覆に残された束枅と一致するのである。この他回廊の壇上の一部には凝灰岩の石敷
が残されており、東方に延びる狭い壇上にも凝灰岩を敷かれたらしい形跡が見られる。
(凝灰岩の粉末が旧地表と見られる部分に残つていた。)

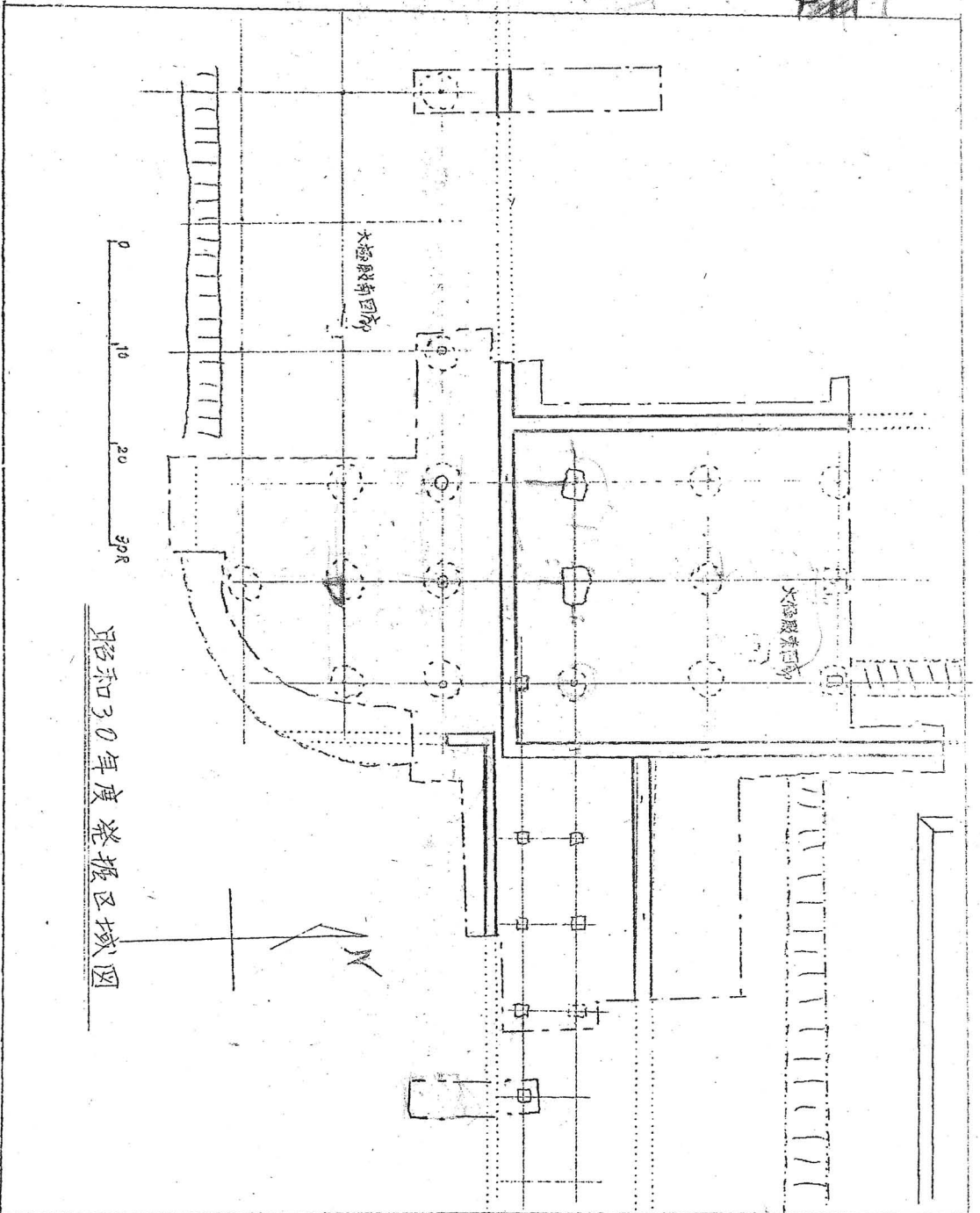
この結果によると、大極殿の周囲が回廊で囲まれていることは藤原宮の場合と同様で
あるが、その南回廊が藤原宮のように東方に延びていない点が異なり、又それより東方
に連なる回廊らしいものかなくて狭い壇上に不明な構築物の跡の見られる点は平安宮の
場合とも全く趣を異にしてゐる。

平城宮は恭仁や難波遷都後の復都の他、平城天皇の奈良復都運動等もあつて、遺跡に
改築の痕跡の残る可能性もあるので、その奥特に注意を怠らなかつたのであるが、礎石

に凝灰岩のものとは崗片麻岩ないし両輝石安山岩自然石のものの混じている筈が見本
された他、着しい事實は見出されなかつた。後者の礎石は後に据え改められた形跡が認
められるのである。その後平城宮建設前の遺跡として、東回廊壇表土下から蓋(さぬき)型
形象埴輪が見出された。

遺物としては瓦の他土師器、陶質土器等の破片が見られるのみであるが、文様瓦は二
三種に止まり、何れも従来平城宮跡より多く見出されていゝものである。

尚当初の計畫では十二堂を囲む回廊の東北隅をおすつもりであつたが、東方への回廊
が現れず、形勢が變つて来たのと遺跡がよくのこつていて詳細を露出する必要が認めら
れたため、発掘範圍を限定して、調査の徹底を期した次第である。

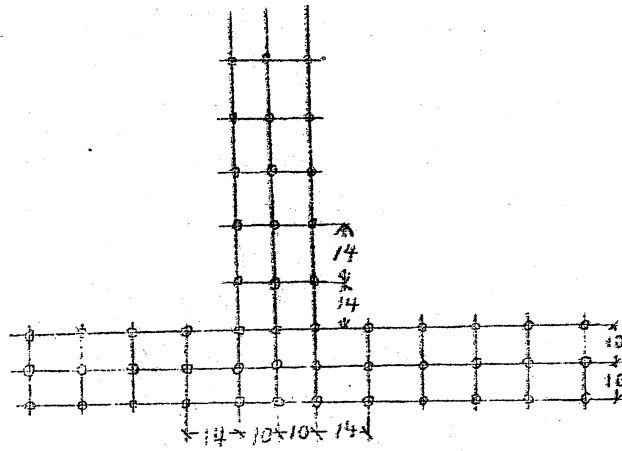


昭和30年度答振区域図

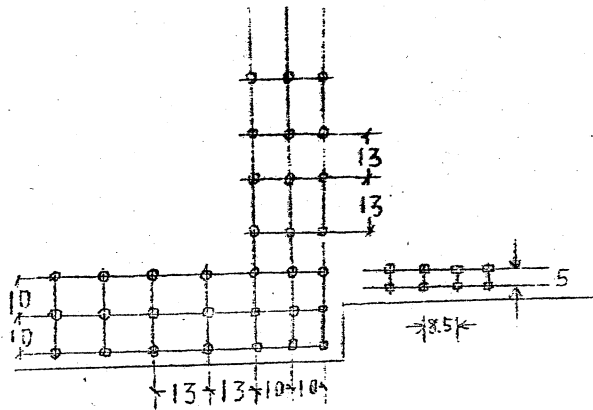
[Handwritten signature]

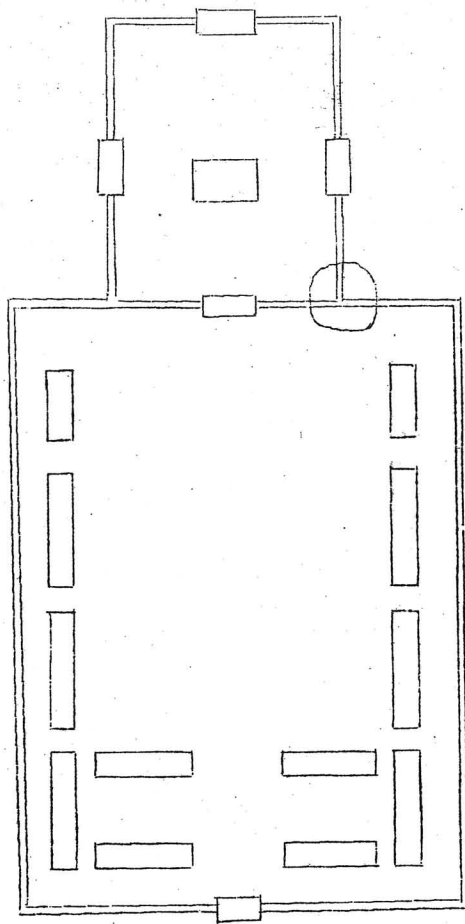
〔瓮堀地桌部分図〕

藤原宮〔本年平城宮瓮堀地桌と同部分〕

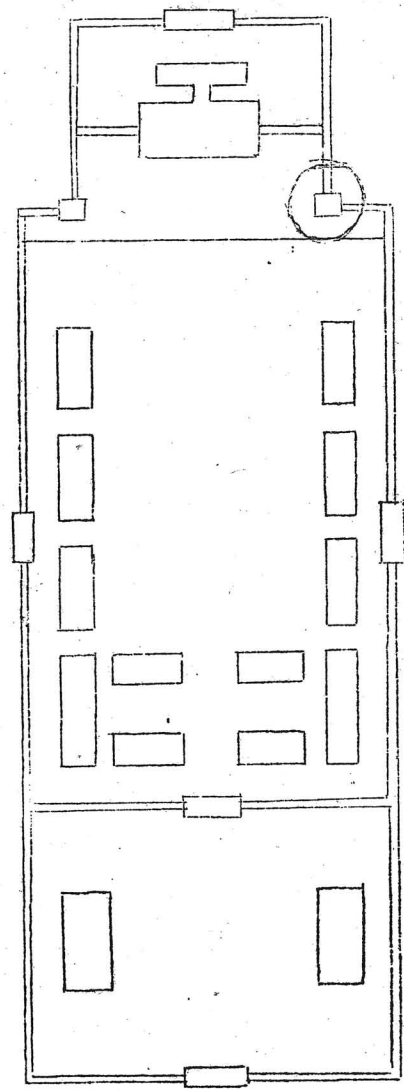


本年平城宮瓮堀地桌復原図





藤原宮 復原図



平城宮想定図
 (関野貞氏による)